

高野聖考

— 其の末路と定着化 —

菊池武

高野山は、納骨霊場として全国的に知られているが、こうした習俗を広めたのが彼の有名な「高野聖」であった。これ等に就いては、既に柳田国男翁(『定本柳田国男集』27)や五来重博士(『増補高野聖』)等の多くの研究成果で紹介されているが、彼等は、俊寛・有王の物語や、弘法大師の靈驗等の関与をはじめ、発心譚・懺悔譚を言葉巧みな唱導により、納骨参詣を勧誘し、且宿坊も提供した。そして、勧進活動を続けながら路傍の無縁の白骨や、民衆達の依頼する遺骨を高野山に納め、菩提を弔ったのであった。

所が、中世末より近世にかけて、彼等も時代の波を受け、次第に変質して行く中で(私的高野聖の出現もあつたらう)、庶民大衆にどう接し、迎えられていたか、其の末路となると余り文献資料とは縁のない階層の為、必ずしも明らかではない。そこで今回は、伝説・伝承をも取り入れながら、高野聖の各地での様相と、其の末路を概観しながら庶民仏教の解明の一端としたい。

先づ、高野聖の末路の特筆すべきものとして、呉服聖・商聖と呼ばれるに至った事である。特にこれに関して、色々論がある文献として、長崎出島の居留地門前の制札に、「高野聖之外出家山伏不可入事」(『笈随筆』11)とあるのを、唯一の開かれた商業貿易の

一部に関与していたのではという事である。それはともかく、東京都港区三田慶応大学付近の坂を「聖坂」と呼んでいる。これは、古代・中世の通行路で、商人を兼ねた高野聖が開き、其の宿所もあつた為といわれている(『江戸鹿子』『江戸砂子』『東京府志料』)が、福島県の会津若松にも、昔から聖宿の「斎主(頭)」を中心とした商聖がいて、真言宗の僧侶に準ずるとしている(『町風俗・習』頁2)。そこで内容は、「笈の中よりさまざまの物をとり出て、物あきなふ」(『胡蝶庵随筆』)、「高野山の商物を諸国の問寄にて色品調へ笈に入てありくもの也」(『拾椎雑話』8宝曆7)と、小間物商的な所を見せたり又、高野山の各寺院で使用する、仏絵等の表具の裁ち残しの錦の切端を、守り袋として使用すれば、忌穢・悪魔・厄神は落ち除かれるといったり(『慶長見聞集』3)、「親鸞聖人御作之護摩灰ニ彫刻像の阿弥陀如来」(安永5)だとか、「弘法大師御造之三尊灰体御像仏」(享保3)という買入代金受取状が、真宗王国越中の篤信家に存しているのも、為体の知れない物を尤らしい顔をして、売りつけている様相が窺える。此の他、彼等の詳細な商業活動は、『当代記』(2)『賤者考』『嬉遊笑覧』(11)『非事史事歴』(45)等に見える。然し其の内、「近年此聖を見る事希なり」(『拾椎雑話』同前)と、消え行く実態を伝え、次第に、「商をやめ候聖」(『町中諸事御仕置帳』明暦4)として、定着化の傾向を見せるが、不住の者として統制を受け続ける。

さて、もう一つの高野聖の末路として、悪行化・低俗化が目立って来る。これ等は、前掲の『当代記』や『新增犬筑波集』等でも知れ、其の結果として、信長の千何百人の征伐や、秀吉の根来寺の焼打ちは有名で其の後、江戸に入っても統制は続くのである。

つまり彼等は、各地で様々なトラブルを起し、終には命を捨てる者もいた様で、石祠を建てたり〔設楽〕6)、埋めたという「聖石」の伝承(『改訂綜合日本民俗語彙』)等も残して行く。こうした状態は、非業の死をとげ崇る者としての恐れからの結果であろうが、それは反面、「聖神社」(『日本庶民生活史料集成』18・カヤカベ)や「祭神」(『設楽』同前)として祀つたら、腫物・梅毒・婦人病等に効驗があるとして、近郷近在から参詣に来る様になったという極めて現実的・実利的庶民信仰の展開となつて行く。此の設楽郡では、五来博士の前掲書によると、「ひじり地蔵」「お聖さま」なるものが存し、神や仏として祀り、現在でも同様な効驗があるものとされているとし、他にも高知県本山町で、定着開拓して「聖神」となつた高野聖を紹介している。

こうして見て来ると、「此笈に小児を入れて行と申習はし、小児の啼を止めし也」(『拾雅雑話』同前)とか、「七十年前迄は、高野聖は家々で女の病氣や頭痛など病氣の人には祈禱をしてやつたり、薬を与へたりして一文二文と謝礼を貰つて歩いた」(『設楽』同前)という如く、遠くから寄り来る遊行の尊い僧として、畏敬の念を持つて歓迎された(異境人接待)事をも知つておかねばならない。

こうした、商聖化と悪僧化して行く末期の彼等は、前述した様に次第に各地に定住し、開拓をしたり、辻堂や草庵を入々の信仰を得て、寺院へと進展して行つたりもしたのであろう。

大和の吉野群山の大台の原山は、『北山由緒記』によると、慶長十一年高野聖のタンサイ上人によつて開かれたというし、『備中誌』は、賀陽郡溝手村服部郷に、かつて二十数軒の「非事吏坊」が存在していた事を紹介している。又、盆踊に高野聖の身に付けていた

杖・笠・笈等を歌い込んだ口説歌が存する事も、其の庶民との触れ合いで注目される(『設楽』10)。そこで、特にこうした事例が多く見られる越中を中心として紹介してみよう。

越中礪波市紺屋島の真宗本願寺派宝洲寺(高野姓)は、親鸞が高野山に参詣した時、チケン阿闍梨という僧が帰依し、親鸞流罪の折共に従つたが途中別れ、ここに住み着いて村を開き、寺院を建立したというもので、貞享元年の「由緒承伝申村々書上申帳」にも、「紺屋島村、先年庄川通申高野聖流懸り居申、其より此所を紺屋嶋村と承伝申候」とある。更に、越中礪波郡是安村の松林寺は、文政七年の『由来並持宮御尋ニ附書上帳』によると、高野山の雲水が定着したといひ、同郡高宮村の法船寺の『縁起』も同様な事を伝えている(木場明志氏「真宗寺院・山伏寺院の關係形態の一例」『尋源』28)。他に、射水郡二口の誓光寺は、覺鑊系高野聖の定着といわれ、下新川郡入善町舟見の念光寺も、明遍の弟子が開いたと同寺の縁起にある(長島勝正氏「熊野比丘尼・高野聖と浄土真宗の寺」『富山史壇』42)。こうした事例は、他にも多く見られ、礪波地方には俊寛塚も多くあり、伊藤曙覧氏も文書・縁起・伝承・芸能から調査された結果、現在高野聖の開拓村・寺院と確認出来るものとして、二十数例紹介されている(「越中の願人坊おどり」『仏教と民俗』8)。

こうして、商と悪行を続けて定着化して行く高野聖達であったが、全国の津々浦々を遊行した民間遊行勧進型として、念仏信仰の隆盛と庶民大衆の生活に大きな影響を与えた足跡は、大としなければならぬ。こうした事例の資料や伝承は、各地に於てこれからますます出て来ると思われ、其の研究成果が期待されるのである。

―註は紙面の都合で省略―

(大谷大学大学院修了)